

## 研究報告

# 「障がい」と「差別」に関する一考察 ～「障害者差別解消法」と「小林一茶の俳句」～

島津 彰

北翔大学教育文化学部教育学科

## 抄 録

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（以下「障害者差別解消法」とする）の平成28年4月の施行を前に、本学においても障がいのある学生のための「合理的配慮」（Reasonable accommodation）に関する事項の充実を図ることが緊要な課題である。

本稿では、この法律の「障がい」及び「差別」に視点を当て、「障がい者への差別」が「障がい者以外の人々への差別」と同根であり、同法の「不当なる差別的取扱い」を歴史的な視点で俯瞰する。考察の際に小林一茶の俳句世界は、江戸時代の身分制の社会にあっても、障がい者及び被差別の対象であった人々への温かい眼差しをもち、今日の「差別解消の精神的な支柱」になり、この視点をもつことにより本法令の趣旨が深く理解され、「合理的配慮」の指針になると考える。

キーワード：障害者差別解消法、小林一茶、合理的配慮、人権問題、ヘイトスピーチ

## I. 「障害者差別解消法」の理念

### 1. 「障がい」に関する意識調査について

#### 1) 「障がい」への偏見

内閣府（平成26年版：障害者白書）によると障がいのある人の概数は身体障がい者393万3千人、知的障がい者74万1千人、精神障がい者320万1千人であり、人口の6%が何らかの障がいを有している。

同白書（平成25年版）によると、国民の意識調査（平成24年7月実施）の中で、「障害のある人に対する差別や偏見があるか」の質問に対して、「ある」と回答した人は89.2%である。「共生社会」の言葉を「知らない」と回答した人は35%であった。「障害者週間」の存知では、71.4%が知らないと回答している。9割近い人が、「差別や偏見」があることを認め、「障害者差別解消法」の第一条の文中にある「共生する社会」の言葉を知

らない人が約3割、「障害者週間」では7割が知らないと回答しており、啓発活動等の諸課題がある事を示している。

#### 2) 「しょうがい（障害）」の表記

「しょうがい（障害）」の表記については、内閣府の平成22年の調査結果では、「障害」の表記については、改める必要がないのが43%、必要があるのが21.9%であった。「改める必要が無い」を選択した理由では「平仮名のみや漢字と平仮名の表記は不便である」「広く普及している現状」「害を碍や『がい』と表記することで困難性を覆い隠している」などの意見がみられた。

「必要がある人」の新たな表記名は「障がい」が40.9%、「障碍」が7.8%であった。「障がい」では「柔らかい表現でイメージがよくなる」「『害』の字は否定的なイメージを与える」などであった。「障碍」では「『碍』の字は価値中立的である」「『害』の字は否定的なイメージを与える」「国民の意識が改善される」などの意見があった。

平成24年の調査では、表記として「障がい」が35.5%、「障害」が33.8%と平成22年の調査と比較し、表記に関する変化があるが、「障害」を支持する人が約3割おり、障がい当事者が、「害」の文字を見てどのよ

\* 『しょうがい（障害）』の表記については、法令用語などは「障害」で、それ以外は「障がい」とする。また「差別用語」については、当時の時代背景において使用されていた用語を使用している事を付記する。

うな気持ちになるのか等の課題が残る。

ちなみに北海道の法令用語は「障害」であるが、保健福祉部の課の名称を「障がい者保健福祉課」と「がい」の文字を平成21年より変更している。表記をどのように考えるかは、「障がい」についてどのように考えるのかと連動しており、単に表記上の問題ではないと考える。

## 2. 「差別」禁止法制の系譜

「障害者差別解消法」の成立は、「差別禁止」の法制の整備充実の歴史と言っても過言ではない。ここで成立過程を世界（国連など）と日本の視点から概観する。

世界的にみると、障がいを理由とする差別を包括的に禁止した法律を世界で初めて制定したのはアメリカであり、その背景には1960年代に高まりをみせた人種、皮膚の色、宗教、性または出身国を理由とする差別を禁止する公民権法の成立があった。この中で障がい者についても社会参加を求める運動が活発に展開され、障がい差別禁止法制の制定へとつながり、「障害をもつアメリカ人法」（1990年）の施行となった。

1970年代以降、国連における「知的障害者権利宣言」、「障害者権利宣言」といった、障がい者を対象とする宣言などは、法的拘束力をもたず実効性を欠いていた。また、それまでに国連で採択されていた7つの主な人権条約（社会権規約、自由権規約、人種差別撤廃条約、拷問等禁止条約、女性差別撤廃条約、子どもの権利条約、移住労働者権利条約）は、障がい者の人権全体への影響力は小さく、「子どもの権利条約」には、障がいに関する規定が盛り込まれているものの、ごく小さな影響力しかもたなかった。

日本では、法の下での平等を定めた憲法14条があるが、明文で「障がい」を理由とする差別を禁止する法律は、長い間制定されてこなかった。日本においては1970年（昭和45年）の「心身障害者基本法」の成立や「完全参加と平等」をテーマとした1981年（昭和56）年の国際障害者年やこれに続く「国連・障害者の十年」を契機として、障がい者福祉施策は、施設入所を核とすることから、在宅福祉などへの社会参加へと変換を迎える。その背景には、ノーマライゼーションの理念の浸透や経済的自立へのなど自立概念の深化があった。

国連の「障害者の権利に関する条約」（2005年5月発効）の批准に向けて、法整備が進められ、日本は2012年（平成24年）に条約を批准した。それまでは障がいのある人の社会的な不利益は「障害の医学モデル」と称されるように、原因をその人にある機能障害に求める考え方からのパラダイム転換を図った。つまり、社会の仕組みに原因があるとの「障害の社会モデル」の提言であり画期的なものであった。

これと並行して検討されていた、改正「障害者基本法」（2004年・平成12年）には、障がい者差別を禁止する規定が盛り込まれ、国や地方公共団体等に対して、基本姿勢として、障がいを理由として差別が存在しないように障がい者施策をすすめることを求めているが、基本理念を定めたものに過ぎず、実効性はないとの理解が一般的であった。

「差別の無い社会を目指す」の理念のもと、具体化した法律が「障害者差別解消法」である。第四条（差別の禁止）では「何人も、障害者に対して障害を理由として、差別することその他の権利利益を侵害する行為をしてはならない。」とあり、「社会的な障壁の除去」や「合理的配慮」についても触れられており、前進した姿がみられる。

同じく、差別禁止法制の「障害者雇用促進法」は、事業主に対し、採用前の場面である募集、採用における平等取扱い、及び採用後の場面である賃金、教育訓練、福利厚生などにおいて障がいを理由とする不利益取扱いの禁止を義務づけている。

## 3. 「障害者差別解消法」における課題

「障害者差別解消法」は名称が示すように、「禁止」ではなく「解消」の名称を付すことにより、「差別」の無い社会を目指すものである。実効的に推進されるために、指針の策定や相談、紛争の解決の体制整備を規定しており、画期的な法律である。第六条においては、何が差別か、合理的配慮としてどのような措置が望ましいのかといった具体的な内容は、各関係機関（国や地方公共団体など）による基本指針によって明らかにしていこうとしている。

「合理的配慮」については、社会全体で育てていくものであり、好事例を積み重ねることにより共有化していこうとしている。この事例の典型である「アメリカ合衆国の障害者教育法（IDEA）」は、障がいのある子どもに「無償かつ適切な公教育」を提供することを目的としているが、その具体的内容は、「関連サービス（related service）」を併用しながら特別支援教育を提供することとなっている。「関連サービス」とは、移動に際しての乗り物や付き添い等、適切な教育を受けるにあたって必要となる補助サービスを意味する。具体的な補助サービスとしては、脊椎損傷により首から下が麻痺している生徒が通常の学級に在籍するために、看護師による付き添いを提供することや、てんかんの発作を抱える生徒に対して、看護師が同乗するタクシーによる通学を提供すること等があげられる。これらの積み重ねが、「合理的配慮」につながるのと考えであるが、事例に対する考え方によっては違いが生ずる課題が指摘できよう。

「差別」の定義は「社会的障壁」の除去としており、細則規定も無くかなり抽象的な表現に留まっている。第七条にある「差別」に関する「不当な差別的取扱い」なる用語は「地方自治法224条」「職業安定法32条」などにみられるが、何が差別かを具体的な事例を積み上げていく中で、概念の共有化を図っていくことが大切であり、過去の歴史が語るように温度差が生じることは想像に難くない。

さらに重要な課題としては、特に民間事業者においては第八条において「合理的配慮」が「努力義務」として押さえられており、「負担が過重でないときは・・・社会的障壁の除去に努めなければならない」とある。「負担が過重」の言葉に関しては解釈の違いでばらつきが想定され、同じような状況でも事業者の考えによって差異が十分考えられる。民間事業者は、限りなく国及び地方公共団体のような「法的な義務」として押さえる必要があり、当事者たる障がいのある人の参加は当然のことである。

#### 4. 差別禁止法制とインクルーシブ教育

「障害者権利条約」24条の教育条項は、完全なインクルージョンという目標の基に、政府に対して障がい者が地域社会において、インクルーシブ教育を受けることを求めているが、障がい者が、効果的な教育を容易にするために、特別支援学校・学級存在を否定的にはとらえていない。障がいの状態、程度によっては、通常学級に在籍するよりも特別支援学校において、より適切な教育を受けられる児童生徒にとっては必要であるとの考え方である。

ただし、ここで留意すべきなのは、「完全なインクルージョン」という目標が前提となっていることである。すなわち、「障害者権利条約」や「障害者差別解消法」におけるインクルーシブ教育や合理的配慮の目的は、障がいのある子供たちが、可能な限り通常学級に在籍し、合理的配慮を受けることで適切な教育を提供されることにある。

これに対して文部科学省の特別委員会報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育の推進」(2012年7月)では「合理的配慮に関する事項」では、合理的配慮の基礎となる環境整備として、「基礎的環境整備」との概念を提示している。これは、「合理的配慮」は「基礎的環境整備」をもとに個別に決定されるものであり、それぞれの学校における「基礎的環境整備」の状況により、提供される「合理的配慮」は異なることになる。「基礎的環境整備」とはまず、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校を設置することで、子ども一人一人の学習権を保障する観点から多様な学びの場を確保す

ることが前提となる。「障害者権利条約」のように、「合理的配慮」を行うベースラインを通常学級とするのではなく、「多様な学びの場」を基本としている。

「障害者権利条約」が、障がいのある子供を原則通常学級に在籍させることを前提とし、特別支援学校を例外的なものとしているのに対し、個別の教育にニーズに応じる事を前提に、特別支援学校も通常学級も就学先の選択肢の一つとしてとらえている。

インクルーシブ教育の目的は、障がいのある子供に対して、可能な限り障がいのない児童と同じ環境において、それぞれのニーズに応じた適切で「質の高い教育」が保障されて、初めてインクルーシブ教育が実現されるものである。

以上のように、様々な課題があるが、「差別解消」はこのように世界が目指している人権の理想と重なり、良き「合理的配慮」の積み重ねと、過去の負の遺産である、「不当な差別的な取扱い」を過去の事例から検証し、これらを繰り返さないことが、実効性のある法律になると考える。真に歴史から学ぶとはこの意味であろう。

## Ⅱ. 障がい者への「差別」の歴史

### 1. 「障がい者」の二重の差別構造

「障害者差別解消法」の中の「不当な差別的な取扱い」は皮肉にも多くの積み重ねがある。とりわけ「障がい者」は「差別」を容易とする経済的、思想等の文化的に歪んだ社会構造の中に、丸裸の状態で投げ出されていたのが過去の歴史である。差別は「障がい者」だけの課題と捉えることは「差別」が生ずる本質を押さえておらず、狭い認識の仕方である。「障がい者」以外で差別を受けていた人々と同心円との認識をもたない限り、いくら法律を作っても実効性が無く、新たな法律を作らざるを得ないことになりかねない。

### 2. 日本における「障がい者」への差別

#### 1) 近世までの障がい者

「障がい」に関する記述は、「古事記」の蛭子伝説はもとより、「日本書紀」による「施薬院」などの記述がみられるが、「律令」国家体制において「戸令」の中の「目盲条」に、当時の障がい区分が記載されている。「軽度障がい」の「残疾」には「両耳聾」(両耳の聴力障がい)。「中度障がい」の「廢疾」には「おろか人」(重度の知的障がい者)、「ひきひと」(小人症)、「腰背折」(脊髄損傷による麻痺)。「重度障がい」の「篤疾」には「悪疾」(ハンセン病)「癲狂」(てんかん及び精神



疾患)、「両目盲」(両眼の視覚障がい)と規定していた。この区分は租税の徴収軽減のためであり、福祉としては慈悲的配慮の対象であった時代である。

鎌倉時代の時宗の開祖一遍上人の布教の様子を描いた図1の「一遍聖絵」<sup>1)</sup>には、「琵琶法師」が「小法師」を伴っている姿が描かれている。時宗の教えの中に安住の居場所を探し出す姿が見られる。



図1 (一遍聖絵：第6巻：片瀬浦の念仏踊りに向かう姿)

視覚障がいの人々は、早くに集団を組織し、とりわけ江戸時代には将軍・徳川綱吉の治療に当たった杉山和一は検校の地位に就き、官位の上から検校、別当、勾当、座頭を組織していった。塙保己一が群書類従を編纂し、その業績がヘレン・ケラーをして日本を訪問したい動機の最大のものであったことは特筆すべきことである。ただ視覚障がいの人々は集団の中に、ハンセン病の人々を除外したことは差別の根絶の難しさを示している。

## 2) ハンセン病患者への差別

「一遍聖絵」(市屋道場の境内)には、図2に示すように布教した京都(市屋道場)で、堀ぎわに他の乞食と離れた所に小屋がけをし、顔を布で覆った人々(「ハンセン病」の人々)が、他の人とは距離を置いた様子で描かれている。同じ「関寺(大津市)の門前」にも他の乞食と離れて座っている様子が描かれている。

ハンセン病の人々は、特に強く「差別」を受けてきた人々であり、1907年(明治40年)の「癩予防に関する件」の法律で、全国5箇所の療養所が開設され、収容隔離された。その後、平成8年「癩予防法」が廃止され、1996年(平成20年)の「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の成立までの百年の長きにわたり、多くの患者を偏見と差別で二重、三重に苦しめてきたのである。北海道立近代美術館蔵の林 竹治郎の第一回文部省美術展

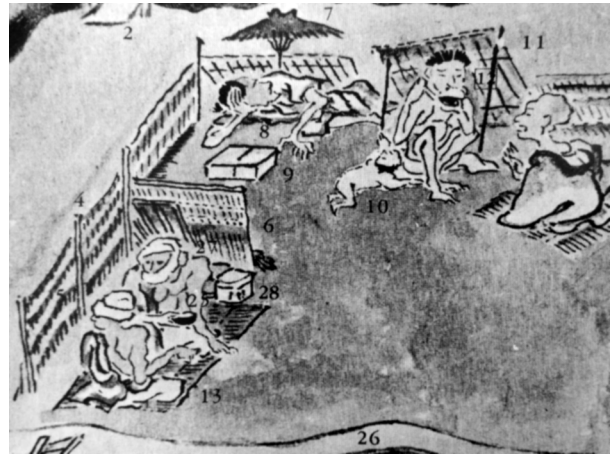


図2 (一遍聖絵：第7巻：市屋付近のさま)

入選の名画「朝の祈り」に描かれている子供(林 文雄)は長じて、ハンセン病の医師として奮闘している。その間、星塚敬愛園に赴き、「断種法に就いて」<sup>2)</sup>と記した講演用の資料を残している。このことは林個人のみの責任に帰する事柄でなく、広く日本の中で優性思想の基に「断種」が横行していたことを示すもので、その当時の時代の差別を知る上で記憶に深く留めておく必要がある。

同じく医師として長島愛生園に関わった神谷美恵子<sup>3)</sup>は「人間をみつめて」(1957年：昭和32年)の中で、ハンセン病の中の精神障がいの人々は、何らの治療を受けずにいる様子を次のように記している。「もう一つのショックこそ、現在に至るまで島と私とを結びつけるきっかけとなってしまった。それは園内の精神病患者の実態調査をした時にみた光景である。老朽化した木造の小さなバラックにいくつかの板敷の座敷牢のようなものが並んでいる。その一つ一つに、垢にまみれた患者がとじこめられていて、文字通り荒れ狂っているのであった。」

当時の悲惨な状況が記録されており、差別の中にまた差別があったことを知ることができる。古くは聖書にもハンセン病の記述があり、人間の歴史の中で古い時代から、洋の東西を問わず差別の対象であったことは、人類の負の歴史である。

## 3) 現代の「出生前診断」の課題

近年欧米及び日本においても、ダウン症など染色体異常の有無を調べる「新出生前診断」が実施されているが、日本においては陽性と判定されたケースの約97%が妊娠中絶を選択したと報道(平成26年6月28日・北海道新聞)されている。

「静かなる『優性思想』」や「個人的『優性思想』」と警告を鳴らす人は、慎重なる判断をして欲しいと呼びか

けている。様々な要因が背景にあり、個々の事情で中絶を選択せざるをえないケースが多いのであろうが、いずれにしても、個人的な問題として決着をつけるのではなく、障がいのある子供を育てる環境の問題も想定されることから、社会としてどのように関わっていくのか医療、福祉、保健、教育、労働などの専門家による学際的な議論が十分でないまま、単にカウンセリングの質を高めるだけで済むような問題ではないと考える。

### 3. 日本における障がい者の処遇

#### 1) 盲教育、聾教育の苦悩

日本における特別支援教育（盲聾教育）は1878年（明治11年）の京都盲啞院に始まるが、盲学校、聾学校の義務化は1924年（大正13年）の「盲学校及聾啞学校令」による。しかし抜け道があり、財政が厳しいおりには「当面は私学で可」と法律に明記されていた。明治時代の学制公布に始まり小学校令等をもって通常の教育が進展する中、特別支援教育がいかに遅れ、いかに整備が後回しになったかを北海道を例に概観する。

北海道で一番早く、財政難など幾多の困難を乗り越えて1985年（明治28年）に開校した函館盲啞院は、宣教師の妻であったドレイパーさんによるもので、その後小樽、札幌と広がりを見せたが各校全て私立であり、わずかな財政支援で、職員の給料も遅延しがちな経営であった。

そのような中、北海道議会に当たる第八期道会<sup>4)</sup>（大正13年）において政友党の林 儀作は『盲・聾・啞教育についていかなる考えをもっているか』と質問。これに対して道庁の得納内部部長は『盲・聾・啞者の教育については、これを造るべしとの義務を命ぜられているのであるが、なに分たびたび申すように地方費財政が許さない。目下私立に対して補助をしている。』と答弁。林は2年後の大正15年にも質問に立ち『盲啞教育に対して当局は親切を欠く傾きがあるやに聞くが如何か』と食い下がる。これに対して池田学務部長は『盲啞教育に対しては十分留意している。』と答弁。その間、実業学校などは庁立学校としていち早く公的に整備されたのである。

林は昭和2年まで5回質問に立つが（小樽選出の寿原重太郎も同様の質問に立つ）財政難を理由に公立学校として認可されず、昭和23年の「盲学校及び聾学校の就学義務及び設置義務に関する政令」が出てやっと公立学校として認可されたのである。

全国で3番に早期開校をした函館盲啞院（現在の函館盲学校、函館聾学校）は実に五十三年にわたり、補助金だけの経営を強いられたのである。北海道・増毛町出身で日本初の「日本点字図書館」を開設した本間一夫<sup>5)</sup>は当時（昭和4年）の学生であり、「指と耳で読む」のな

かで次のように記している。「あのころの私立盲啞院の経営は決して容易でなく、授業が終わると若い先生たちまでみな受持区域を回って、毎月五十銭、一円の後援会費を集めていました。」と設立当時の様子を今に伝えている。昭和12年の函館新聞には、後援会会員募集の記事が掲載されており、当時の運営の厳しさを伝えている。

ちなみに知的障がい者、肢体不自由者の学校教育の義務化は1979年（昭和54年）であり、盲・聾教育から遅れることさらに三十二年の年月を要したのである。

【文中の後援会（現函館盲聾教育後援会）は現在も活動しており、平成24年に創立百周年を向かえ、特別支援教育に貢献した功績で博報賞を受けている。】

#### 2) 障がい者の「賃金」と「雇用」の課題

地域別に決定される最低賃金は北海道（平成26年10月8日現在）では734円であるが、平成20年6月までは障がい者の場合、「最低賃金除外申請」の制度により、賃金を低く抑えることが可能であった。最低賃金法の第八条に例外規定が設けられており「精神又は身体の障害により著しく労働能力の低い者。軽易な業務に従事する者。断続的労働に従事する者。」などに適用されていた。この法律は、1959年（昭和34年）に成立したもので、障がい者の雇用の拡大を図ることも目的の一つとされていた。この制度の基では、作業経験を積むことによって、除外条件がクリアされているにもかかわらず、事業主と当事者家族との個人的な関係で契約が結ばれている中では、雇用条件の改善を強く要望できない状況もみられた。

いずれにしても、平成20年7月に現行の「減額措置制度」に変わるまで、本来最低賃金とは、生活を支える最低必要な金額であるにもかかわらず、四十九年間も「障がい」との理由で改革がなされなかった。「減額措置制度」の趣旨を実行するためにも、安易に減額を認めるのではなく、労働監督行政の対応が求められるところである。

内閣府の「平成26年版・障害者白書」で、障がい者の雇用の確保を図るために、国や地方公共団体や民間企業に一定の雇用法定率を定め、厚生労働省は各機関の雇用状況を発表している。それによると、未達成は国のレベルでは「原子力規制委員会」、独立行政法人では「労働者健康福祉機構」などである。理由は明らかになっていないが、民間企業に未達成の場合に納付金を納めさせる制度である以上、国が範を示す必要があり改善が望まれる。

また、北海道での未達成は北海道議会事務局、北海道警察本部、北海道教育委員会である。様々な要因があろうが、「議会事務局」は他の都府県では達成しており、

教育委員会は各都道府県教育委員会の中で一番の低さである。2009年（平成21年）に制定された「北海道障がい者条例」の第28条、29条に就労に関する施策が掲げられ、「雇用促進に努める」と記述しており早急な改善が望まれる。

### 3) 児童養護施設の「障がいのある子供」の課題

厚生労働省雇用均等・児童家庭局（平成27年1月）の児童養護施設の実態調査（平成25年2月1日現在）の中で、「養護施設児」に視点を当てると、入所の要因では、「両親の虐待」が18%、「両親の放任・怠惰」が15%、「両親の精神疾患等」が12%の順である。また、「障がい」に関する調査では、28.5%の児童が何らかの「障がい」があり、内訳は「知的障がい」が43%「広汎性発達障がい」が18%、「ADHD」が16%、「身体虚弱」が7%、「てんかん」が4.3%、「LD」が4.1%となっており、その他は「言語障害」「視覚・聴覚障害」「肢体不自由」など多様な障がいが見られる。

本来、「児童養護施設」は障がいのある児童の受け入れを前提とする施設ではないので、法令では人員の加配などは考えられていない。しかし実際には利用状況があるにもかかわらず、職員が障がいに応じた厳しい状況で対応しており、実態と合わない法制度の狭間に子供達や職員はおかれている。

特別支援教育においては、重複障がい学級が設置された場合は教員の加配があり、きめの細かい指導ができる体制ができている。専門家集団であっても、加配の体制がとられているにも関わらず、建前上は在籍しないはずの「障がい児」に対して、児童養護施設は多様な障がいへの対応、さらには、発達段階の違いに応じた指導、時には一対一の指導が必要な場合でも、職員数が不足し指導したくても出来ない条件下にある。

伊藤<sup>6)</sup>の職員の意識調査によると、「労働条件での改善」では『職員を増やす』が26%、『給与の改善』が20%、『労働時間の短縮』が12%となっている。条件整備が十分でない中で、「虐待や放任」などを受けてきた精神面でのケア、さらには「多様な障がいへの対応」など、子供の抱える課題の縮図とも言える環境の中で苦慮している様子が伺える。障がいのある児童にとって「家庭に近い居場所」でありながら、職員は十分対応したくても、職員の定数が保証されない中では、子供達への指導ができないことが想像される。国は実態に合わせて職員定数を改善するなど、「障がいのある子供」への暖かい支援の在り方を検討すべきである。

## 4. 「障がい者」とナチズム

### 1) ナチズムと優性思想

日本と比較して、「障がい児への教育」は早期に始まっている。聾教育は1760年のド・レペによる聾哑学校の開設、盲教育は1784年のアユイによる盲学校の開設と、早い段階で教育が始まったが、ナチズムの時代は差別の極致であった。

ナチズムはその民族至上主義と抱き合わせて優性思想を中核とし、そのため、同じゲルマン民族であっても「障がい者」は根絶すべき対象であり、T4作戦と称する政策は、安楽死や断種などの不妊手術を実行していた。その背景の法律は「後代国民を遺伝性疾患から予防する法」であり、先天的奇型、精神障がい者、知的障がい者、聴覚障がい者、視覚障がい者、てんかんの病気を含め、時には同性愛者も対象であった。犠牲者は公式な数字だけでも7万人あまりで、時には20万との数字も見られる。

アウシュビッツ収容所長のルドルフ・ヘス<sup>7)</sup>の手記では「精神障がい者を車の排気ガスによる一酸化炭素中毒によって殺害した」との記録がある。またランツ・ルツィウス<sup>8)</sup>の「灰色のバスがやってきた」によると「全ドイツの障害者施設に関する調査書を送り、記入されて返ってきたものを専門家に評価させ、『安楽死』に相当する者を選び、『公共患者輸送会社』のバスで移送させる。死亡の後には、遺族に通知を行う。」とある。通称このバスは本のタイトルにもあるように「灰色のバス」と呼ばれ、自動的に排気ガスが車内に流れる仕組みになっていた。ドイツだけでなくポーランドの占領地とドイツ本国双方で、障がい者の大量移送が行われ、移送後にもなく死亡することがたびたびおきていた。

中西<sup>9)</sup>は「ナチス・ドイツと聴覚障害者」の中で、ユダヤ人が運営していた聾学校の惨状を伝える碑銘に「1890年から1942年まで、・・・イスラエル人聾哑院があった。1942年ここからユダヤ人の子どもと成人が、国家社会主義の絶滅収容所へ連行された。・・・」とあることを紹介している。この学校の児童生徒、職員146名はゲシュタポによって連行、殺害されたのである。また、同書で「キール市に住む38歳の聴覚障がい者夫婦には5人の子供があり、全部健聴者であった。しかしヒトラーの側近にまで届けられた嘆願もかきなく、子供たちは全部断種された」と書き残し、多くの「障がい者」が苦しみを受け殺害されたことを伝えている。同じドイツ国民であっても「障がい者」は非情なる差別の下に置かれていた。



## 2) 戦争における謝罪と歴史教育

フランクルは名著「夜と霧」の中で、収容所の中で絶望しかない状況の中にあっても、人間としての尊厳を持ち続けた精神のあり方について触れているが、同時に国家による優性思想は組織的かつ非常な手段で行われることを伝えている。筆者がプラハのユダヤ人ゲットーのシナゴグを訪ねた時に、図3に示すホロコーストの遺品が残されており、その前で時間を忘れたかのように、じっと見つめている多くの人々を見ることができた。



図3 プラハ：「シナゴグに残るダビデの星」

ドイツのメルケル首相は本年5月3日に強制収容所解放70周年の式典が行われたダッハウ収容所（フランクルも収容されていた）の跡地で、「我々の社会には差別や迫害、反ユダヤ主義はあってはならず、そのためあらゆる法的手段で戦い続ける」と演説している。これに先立つことドイツの第六代大統領ヴァイゼッカーは、1985年の戦後40年の式典のなかで、同様の演説をしている。二度と過ちを犯さないとの深い反省があり、それが周囲の国家の信頼を得ていることに感銘を覚える。謝罪には終わりが無く、相手が納得して始めて終わりを迎えるのだとつくづく考えさせられる。

筆者が20年前にドイツのギムナジウム（日本の高校1年生のクラス）を訪ねた時、ナチス時代をテーマとした授業を参観したが、最低でも3ヶ月間、長い場合は6ヶ月の期間に渡って負の遺産である歴史を学ぶとのことであった。日本はどうであろうか。現代史の授業は授業時間の関係で省略されることが多く、第二次世界大戦については授業を行ったとしても数時間であろう。歴史に向き合う姿勢の違いを感じた。まして「障がい者」については、仁木<sup>10)</sup>が「本土決戦の場合、肢体不自由児は足手まといになる。この児童がいなければ、それだけ戦力は増強する。・・・」と触れているような、肢体不自由養護学校の児童疎開については話題にもならないし、障がい者が「徴兵検査」の時に非国民として屈辱的な扱いをさ

れたことも同様である。過去と真摯に向き合っているのが、日本の教育の課題であり歴史認識の課題であろう。

## Ⅲ. 「障がい者」以外の人々への差別

障がい者以外で差別の対象となった人々の状況を概観する。より良い「合理的な配慮」を構築するためにも、「障がい者差別」と同じ根より発生した「不当なる差別的取扱い」の事例を概観することは「合理的配慮」構築のための反面教師である。

### 1. 日本中世の「三十二番職人歌合」にみる賤民

「三十二番職人歌合」<sup>11)</sup>は室町時代の1494年頃に、後土御門天皇の生母の七回忌を契機に作成されたとされている。「いやしき身なる者」として表1に示す職人による和歌を詠む形式をとっている。

11番の農人は職人の分類からすれば異質であるが、その他は農業を生業とせず、定住しない遊行の人々や行商の人があげられている。1番の「千秋万歳法師」や2番の「獅子舞」は、正月の風物詩として昭和時代でも見られたことを記憶している。

図4に示す1番の「絵解」は庶民に仏教絵画（地獄絵図など）を解説する役割を担っており、時には熊野権現

表1 三十二番職人の職能

左	右	左	右
1 千秋万歳法師	絵解	2 獅子舞	猿飼
3 鶯飼	鳥刺	4 大鋸引	石切
5 桂の女	鬘捻	6 算置	虚無僧
7 高野聖	巡礼	8 鉦叩	胸叩
9 表補絵師	張殿	10 渡守	輿昇
11 農人	庭掃	12 材木売	竹売
13 結桶師	火鉢売	14 糖糟売	地黄煎売
15 箕作	櫛売	16 菜売	鳥売

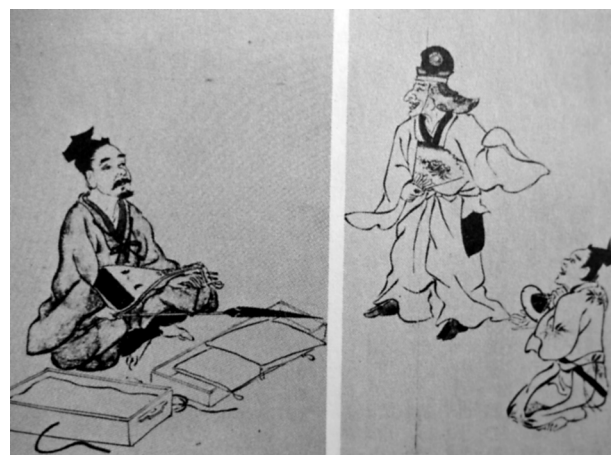


図4 歌合一番：「絵解」と「千秋万歳法師」



図5 融通念仏縁起：「下巻・第9段：中央・猿曳き」

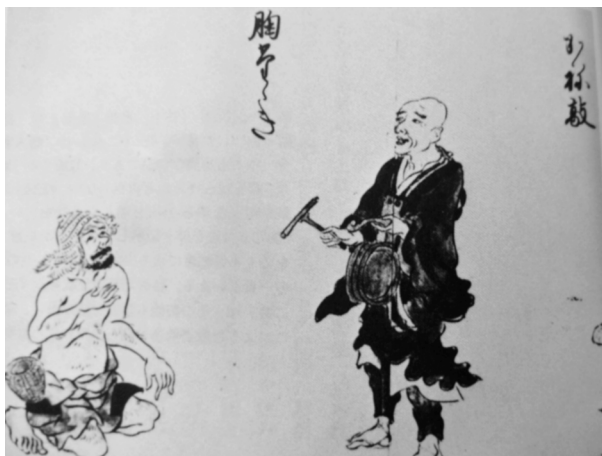


図6 歌合八番：「胸たたき」と「鉦たたき」



図7 融通念仏縁起：「上巻・第3段：中央・鉦たたき」

の勧進を目的に諸地域を巡り歩くこともあった。

図5の「融通念仏縁起」<sup>12)</sup>(清涼寺・1423年)の絵巻に示す2番の「猿曳き」(猿飼い)は今では伝統芸能として子供たちの人気を博しているが、当時は「猿」自体は霊力があり「馬」の守り神として、「一遍聖絵・第10巻」にも既に繋がれた猿が描かれている。貨幣経済が浸透する中、様々な職能特性を生かした人々が社会の中で

役割を担っていくが、多くを占めている農業従事者の視点からは、あくまでも少数者であった。

図6の右の「鉦たたき」は、布教の間には功德のために埋葬の仕事もしており、図7の「融通念仏縁起」の絵巻にも「鉦たたき」が描かれており、その特徴のある姿は目に留まることが多かったと想像される。

図6左の「胸たたき」は、自らの胸を叩き、「春まいらむ」と祝い言を叫んで各地を周遊し門付けを行っていた生業である。賤民の世界を成り立たせている背景には、「貴と賤」「浄と穢」「定着と非定着」が考えられ、農業を経済の基盤とした社会と封建制度とも相まって身分社会を形成していくのである。

7番の高野聖は、本年開創1200年を迎えた高野山の真言密教の教えを全国に広める役割を担い、奥州の果てまで行き、村々ですすめられれば、何日も逗留し、加持祈祷や説法を行い、また京都や諸国の様子を伝えるなど弘法大師信仰を伝える役を担った。

以上の職能集団は、形を変えながらも江戸時代まで社会の中で下層に位置づけられた人々であった。

## 2. 人権と水平社運動

被差別の中で同和に関わる人権問題は様々な啓発活動がなされてきたが、差別された姿を野中広務・辛淑玉<sup>13)</sup>の「差別と日本人」に次のように記されている。「中でも、結婚差別は熾烈であった。反対されて一緒に親元を離れれば誘拐とみなされ、・・・大衆が差別者としてたまない抑圧を繰り返す日常の中で、差別を受ける人々の自死は跡を絶たなかった。」と差別の中で起きた悲劇が記述されている。

歴史的には平安時代に萌芽がみられるが、江戸時代の封建制の確立のために非人と共にその維持のために虐げられ、差別された人々であり、「犬神人」「乞胸」「刑吏」「皮革の仕事」「舞舞」「鉦たたき」「隠亡」などの生業はその一部である。

1871年(明治4年)の「解放令」の後も、「壬申戸籍」などの差別が続くなかで、部落解放の運動は1922年(大正11年)3月3日京都における全国水平社創立をみた。創立宣言文「人の世に熱あれ、人間に光あれ」は、差別解消に関する世界に誇るべき人権宣言文であり、今後も読み継がれていく必要がある。

日本は1910年(明治43年)に韓国を併合し植民地とし人々を蔑視したが、その朝鮮半島の中にも被差別部落の人々と似たような歴史経過の中で生まれた最下層で差別を受けた「白丁・ベクチョン」(1923年・朝鮮衡平社を結成)の人々がいた。部落解放運動は白丁の人々と連帯し、その苦悩を分かちあったことは世界史のなかでも特筆すべきことであり、連帯した活動は少数民族の人々の



連帯運動に通ずる先駆けと言っても過言ではない。

### 3. アイヌ民族への人権侵害

「アイヌ文化振興法」（アイヌ新法）が成立したのは、1997年（平成9年）5月であり、「旧土人保護法」1899年（明治32年4月）が同時に撤廃された。百年近くもの間、同化を推進した「旧土人保護法」が存在していたことは、日本人の権感覚がいかに遅れていることを示すものであり、1986年当時の中曽根首相の「日本は単一民族国家」の発言は、その代表的なものである。

本年5月18日の北海道新聞は「北海道アイヌ協会は、中学校の歴史教科書において、『旧土人保護法』に関する文部科学省の検定意見について、適切な内容に改めるように求めていく。」との記事を掲載した。新法そのものが、先住民族として位置づけしておらず、教科書の最初の記述が「アイヌの人々の土地を取り上げて」とあるのを、検定意見では「アイヌの人々に土地をあたえて」としたことに対する抗議である。カラフトから、本学所在地の江別市の「対雁」に強制移住させられ、気候や食べ物が変わらず多数の死者を出したことも、歴史の彼方の事件として忘れがちである。

諸外国の教育は国民として存在する少数民族の人々の文化・言語を大切にすることを公的に位置づけており、文化の豊かさは、同時に真の国や世界の豊かさに通ずるとの理念をしっかりとって教育政策を行っている。元札幌市会議員の「アイヌ民族は、もういない」の発言は、今も続く人権侵害・差別の一例である。

### 4. 外国人へのヘイト・スピーチ

外国人に対するヘイト・スピーチは、2013年以降、インターネット上で判明しているだけでも、全国各地でデモや街宣活動が360件程行われている。「人種差別撤廃条約締結国」である日本においてのこのような行為は、国際的な人権感覚よりみた場合、時代に逆行する大きな問題である。

異なった人種、民族に対する日本人の優位性感覚について、ジョン・W・ダワー<sup>14)</sup>は著書「人種偏見」の中で次のように主張している。要約すると「太平洋戦争を引き起こした本質的な要因は、経済問題ではなく、他の民族とりわけアジアの他の民族に対する蔑視及び優越性の感覚をもつ日本人の特性にある。」との指摘である。日本が優れておりアジアの頂点に立つ『大東亜共栄圏』は、「東亜」を第一段階（満州、中国等）から範囲を広げ、第四段階（トルコ、イラン等）までとしたことは、各国の固有の文化・言語を無視した妄想より狂気に近い発想である。「八紘一宇」の名の下に戦争を遂行していったのは、他の民族に対する蔑視・差別感・優越感な

しに考えることができない。

このことは、学校教育における「いじめ問題」と根本において変わらず、マイノリティーの人々に対する、言わば「大人版のいじめ問題」である。文部科学省の「いじめ」の定義は、「一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」としている。ヘイト・スピーチの場合、一定の人間関係が無くても、受ける側の精神的な苦痛を感じることを前提にすれば、大人に成りきれない人の行為は責任が重大である。

### 5. 教員採用における外国人差別

#### 1) 「当然の法理」の課題

日本においては外国籍の人が、公務員としては正規職員に就くことができず、管理職への道が閉ざされている。このことは、公務員の仕事が「国民に対する奉仕者であり、公権力の行使者たる者は日本人であるのが当然である」との『当然の法理』との考え方が背景にある。「当然の法理」とは外国籍の公務員採用の可否に対して1953年（昭和28年）内閣法制局が回答した文言により、法令上の規定がなくても当然不可であるとの回答である。

このことを教員採用において振り返ると、過去には北海道のみならず、他都府県も国籍条項を設けて「講師」への道さえも閉ざし門前払いを行っていた。1984年（昭和59年）に長野県教育委員会は文部科学省の強い指導で試験に合格したAさんの教員採用を取り消し、常勤講師としての採用に変更したのも、その一例である。

北海道教育委員会の「公立学校教員採用候補者選考検査実施要領」には、平成2年度まで「日本国籍を有する者」のみとし、外国籍を門前払いし、翌年の受検から日本国籍を有しない者は、「常勤講師」としての採用との一項を設けた。「講師」の道は開かれ、やや改善されているが、正規採用に関して国の基本的な考え方は変わっていない。

#### 2) 「公権力の行使」の課題

ここで課題を二点に絞り整理する。

一点目は、外国人は公務員になれないにも関わらず、1982年（昭和57年）に「国立又は公立大学における外国人の任用等に関する特別措置法」（現在は国立大学が独立行政法人となるに伴い、『国立又は』が削除）により、外国籍の公務員が生まれたのである。喜ぶべきことであるが、小学校、中学校、高等学校の教員は正規職員になれず、大学教員だけとの特別措置法は、国自らが「当然の法理」を一方では認め、一方で否定する自己矛盾を露呈したことになる。

二点目は、「公権力の行使」である。一体それが何かの吟味が十分なされているのであろうか。教員における「公権力」とは、一般には「成績評価」「卒業認定」「生徒等に対する懲戒に関する事項」であるが、教員一人で懲戒処分を決定することは考えられず、「成績評価」「卒業認定」も最終的決裁は学校長である。また、「教授に関する事項」と拡大解釈で考えた場合でも「学習指導要領」の法的拘束力は「伝習館高校事件」の判決でも明確なように「自己流に教えるなど」の逸脱はあり得ない。教員は管理職も含めて、法令の服務規程の中で職務を遂行しており、外国人だから自由に振舞えることはあり得ない。国がそれを盾にとるならば、法的拘束力を自ら否定する、これまた自己矛盾に陥るのである。

グローバルな視点で国際関係を考える時代にあっても、公務員の各職の性質を実定法との関係で性格付ける努力を放棄したまま、包括的に「当然の法理」を六十二年も踏襲している現実がある。「国際理解教育」が大切と言いながら「内なる国際化」もできない鎖国的な教育行政は、硬直化していると思われる。明治時代の多くのいわゆるお雇い外国人（北海道大学のクラーク、開拓使顧問のケブロン、地震学の開祖ミルンなど）が日本の近代化に大きな力を発揮し、彼らを抜きに日本の近代化はなされなかったものであり、北海道においては今の発展の基礎を作った人々である。彼らは確かに、雇用契約に基づき年限を決められていたが、外国人の力がいかに文化を豊かにしたかは歴史が証明している。

## 6. 世界史にみる人種・民族等の差別

古くは、アメリカの黒人奴隷やインドの不可職賤民、スペインのカゴの人々。南アフリカのアパルトヘイト、中国におけるウイグル族やチベット人の問題。クルド人問題。最近報道されている、ミャンマーの「ロヒンギ」の人々など、人間は人種・民族などの差異の理由によって差別する事例は枚挙にいとまがない。国連の「人種差別撤廃条約」の前文「人間社会の理想に反することを確認し・・・」は崇高なだけに、現実とのギャップに戸惑うことが多くある。

ロマよりも差別用語であるジプシーで知られている人々は、歴史的にはインド北部よりヨーロッパに移動しルーマニアでは14世紀～19世紀にかけ「ジプシー奴隷制」の下で長い差別の歴史の中に置かれていた。最近上映されたポーランド映画「パプーシャの黒い瞳」は、モノクロームの映像の中に、差別を受けたロマの人々の生活を活写している。ユダヤ人の影に隠れて知られることが少ないが、ナチス政権下で辛酸な生活をおくり、優性思想の基に虐殺や断種が強制収容所で行われていた。金子<sup>15)</sup>はその著書『「ジプシー収容所」の記憶』の中で次

のように述べている。「ある日、もう識別できないほどすっかり変わり果てた姿の姉が本当に私の前に現れました。頭は丸坊主にされ、骨と皮ばかりになっていました。まさに生きた骸骨でした。・・・姉の子供たちがすでに生きてはいないこともその時にはじめて知りました。アウシュビッツのガス室で殺され、その遺体は焼却されたそうです。」と当事者の手記を紹介している。

「ノーマライゼーション」の提唱者であるバンク・ミケルセンは、デンマークにおいてレジスタンス抵抗運動のさなかに逮捕され「ウェスターンの強制収容所」に護送された。そこではユダヤ人、ロマの人、障がい者など多くの人が収容されているのを目の当たりに見て、どのような人々も人権を尊重する「共生社会」でなければならぬとの原点を学んだとされている。「ノーマライゼーション」の理念は、皮肉にも強制収容所における体験が基になっていることは、周知のことである。

2014年にノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスザイフさんの存在は大きな光明である。女性が十分教育を受けることのできない差別に対して大人も及ばない勇気その叡智で活動したことが、受賞に繋がっていった。たった一つの解決策は教育であると訴え『一冊の本』『1本のペン』と演説した姿に感動を覚えた人は多いであろう。差別は人間の存在する限り、無くならない宿命と言え、それで終わりにするだけに、教育や啓蒙活動などの場で、絶えず辛抱強く取り組むことが求められている。

## Ⅳ. 差別と小林一茶

これまで、差別を「障がい者」と「障がい者以外」を概観してきたが、江戸時代の身分制社会の中で、小林一茶は差別の対象であった「障がい者」や「障がい者以外」で差別を受けてきたいわゆる「被差別民衆」の人々に暖かい眼差しを抱いていた。

この背景には、彼の人生の様々な苦難（母親と早くに死別、義母や義弟との確執、奉公の辛さ、貧乏な暮らし、子供を4人も失い、妻にも先立たれるなど）が、虐げられた人々への共感となり、心の叫びとして俳句の形になったと思われる。その精神は「心でしか見えない人々」の一言に尽き、法令が求めている「合理的配慮」の基をなす精神であり、一茶について考察することは指針を得ることに繋がると考える。

### 1. 小林一茶の評価

江戸時代の俳人の中での評価では、一般に芭蕉や蕪村より一段落ちるとの評価があるが、大正時代から昭和初期に活躍した、日本史学者の津田左右吉<sup>16)</sup>は「一茶は俳諧の作者ではなくして俳諧の人であり、職業としての俳

諧師ではなくして人間としての俳人である。そうして人間としての追隨者が出来ないと同様、俳諧においても他人の模倣を許さざるものであった。」と高く評価している。

日本文学者のドナルド・キーンも同じく評価しており、現代俳句協会会長を務めた金子兜太は、一茶の言葉を引用して自らも「荒凡夫」と評し、その著作集2巻で「小林一茶」と題し評伝を書いているなど並々ならぬ傾倒を示している。このように一茶の俳句は江戸期の他の俳人と比較しても、孤高の地位を占めていることが評価されている。

## 2. 「生い立ち」と「江戸の時代背景」

### 1) 生い立ち

一茶は1763年（宝暦13年）信濃国柏原（現在の長野県信濃町）の中規模農家に生まれ、母は3歳で死去。八歳で継母が来るが、折り合わず十五歳で江戸に奉公に出る。継子に関する俳句は、一茶の姿が二重写しになっている。

- ・す、け紙ま、子の風としられけり（文政句帖）
- ・ま、子風つぎのいろ～見へにけり（文政句帖）

その後、五十二歳で帰郷するまで、俳諧の師として一年の内三分の一は各地を行脚する生活をおくった。一茶は五十二歳で結婚し、五十四歳の時に生まれた長男千太郎は一月あまりで没し、五十六歳の時の長女さとは一歳で没する。長女が元気な時の句が『おらが春』（這え笑え二つになるぞけさからは）に残され、死に臨んでは（露の世は 露の世ながら さりながら）と最愛の娘の死を受け入れられない心境を詠んでいる。後に生まれた2人の子も没し、さらに奥さんも没し、2番目の奥さんとは離縁し、3番目の奥さんとの子供は、一茶が没した後に生まれる。

家庭的にはあまり恵まれず、六十五歳（1827年・文政10年）で没するが、一茶の俳句の独自性は彼の生涯の出来事と深く関わっていることは言うまでもない。その後弟子たちによって、今日まで伝わる俳句が編纂される。

### 2) 江戸の時代背景

江戸時代の文化区分では化政文化の時代であり、時代を代表する滑稽本には、十返舎十九の「東海道中膝栗毛」などがある。

一茶が江戸に住んでいた年代と重なる、江戸日本橋を中心として描いた絵巻物「熙代勝覧」（ベルリン東洋美術館蔵）（1805年：文化2年作製）を模写した作品が東京日本橋・三越デパートの地下入り口近くに展示されている。

小沢<sup>17)</sup>の解説本『「熙代勝覧」の日本橋』では「二百



図8 「熙代勝覧」：猿回し

年前の大江戸の町の日常生活へ我々をタイムスリップさせてくれるのです。」と述べているように、生き生きとした人々の日常生活がうかがえる。一茶の生活が想像できる絵巻で、特に、「障がい者」や「下層と位置づけられていた人の職業」の姿が描かれていることに注目したい。

前者では「琵琶法師」（2組）「あんま」「江戸患い」。後者では被差別の人々の職業であった図8の左下にある「猿回し」が描かれている。他の場面には「雪路直し」「願人坊主」「掃除しよ」「門付け芸人」「こも僧」が見られ、乞食とはほぼ同義語の「巡礼」「子供の巡礼」が描かれている。一茶はこれらの人々の生業を句に詠んでいる。

また、一方で一茶の時代は浅間山の噴火など「天明の大飢饉」（1782年～1788年：天明2年～天明8年）で未曾有の餓死者が続出し、乞食とならざるを得ない人々が続出した時代である。一茶と同時代の優れた紀行文を数多く残した菅江真澄<sup>18)</sup>は、飢饉の時に東北地方を旅した時の悲惨な様子を残している。「外が浜風」（天明5年）では「これはみな餓死したものの屍です。・・・行き倒れた者が多くなり・・・あやまって死骸の骨を踏み折ったり・・・」と凄惨な様を伝えている。一茶の乞食を詠む歌が始めて出てくるのは、1791年（寛政3年）で、飢饉により多くの人々が土地を離れ、江戸で流入を制限されていた乞食として、住み着いたことが推測される。一度乞食になるとその境遇から抜け出ることが難しかったと思われる、一茶の乞食を詠んだ句は増えていく。

## 3. 一茶俳句の特徴

一茶の詠んだ俳句の数は約二万句あまりで、芭蕉の約千句、蕪村の約三千句と比べると比較にならない多作であった。子供に関する句で良く知られているが、生き物について詠んでおり、雁（375句）、蝶（362句）などが





図9 一茶・終焉の土蔵

多い。また他の俳人があまり詠まなかったハエ、虱、蚤など小動物も対象であった。豪雪地帯なので雪の句は多く、同時代の鈴木牧之（新潟の人で雪に関する記述の『北越雪譜』の著者。）と同じ感覚で雪の俳句を作っている。

しかし、一茶の特徴はなんといっても「目には映っても、見えない人々」つまり「心でしか見えない人々」を暖かい眼差しで詠んでいる。その一つが「障がい者」であり、二つ目が「被差別民衆」の人々である。その対象は、江戸時代（浅草）の被差別民衆の基締めで、大きな組織を束ねていた弾左衛門の「弾左衛門由緒書」<sup>19)</sup>（1719年）に記述されている職業の人々である。弾左衛門は自分の配下にある職業（長吏、座頭、舞々、猿楽、非人、猿曳き、鉢たたき、石切、放下、渡守、山守、獅子舞、傾城家）を列挙している。一茶はこれらの人々を句に詠んでいる。

これらの職業は先に触れた、室町時代の賤しき職業とされた「三十二番職人歌合」と符合するものがある。例えば「獅子舞、猿飼い、鉢たたき、渡守、石切」などがそれに当たり、時代の中で連綿と受け継がれ、代々その職を担ってきたと思われる。

## V. 一茶の俳句世界

一茶が「心の目」で読んだ詠んだ俳句を「障がい者」「被差別部落」「被差別の人の職業である『大道芸人』『生活困窮者』などに分類して記述する。一茶の暖かい観察眼がなければ詠まれなかった俳句であり、一般の人々には白眼視され見むきもされなかった差別の対象の人々であった。一茶は同時代に生きた血の通った人々として句に詠んだのである。（以下の俳句は『一茶の俳句データベース（一茶館）』を活用し、抽出語句を訂正して使用した。）

### 1. 障がい者

#### 1) 視覚障がい

- ・ 蟬鳴や盲法師が扇笠（文政句帖）
- ・ 棧や盲もわたる秋のくれ（八番日記）
- ・ 小盲や身を寒月になして行（七番日記）
- ・ 小盲や右も左もむら時雨（七番日記）
- ・ 木がらしや棧を這ふ琵琶法師（八番日記）
- ・ 五月雨又迹からも越後女盲（八番日記）
- ・ 木がらしやから呼びされし按摩坊（八番日記）
- ・ 夕立の真中に立座頭かな（八番日記）
- ・ 小坐頭の追いつめられし時雨哉（八番日記）
- ・ 坐頭坊につゝかれけり雪仏（文政句帖）

#### 2) 聴覚障がい

- ・ つんぼ札首にかけつゝ寒念仏（文政句帖）
- ・ しぐるるや飯碗たたく唾乞食（八番日記）

### 2. 被差別部落

#### 1) 河原者

- ・ 正月やゑたの玄関も梅の花（七番日記）
- ・ えた寺の桜まじゝ咲にけり（七番日記）
- ・ ゑた村（の）御講職やお霜月（八番日記）
- ・ 皮剥が腰かけ柳青みけり（発句題叢）

#### 2) 隠坊（火葬場の仕事の従事者）

- ・ 隠坊がけぶりも御代の青田哉（文化句帖）
- ・ 隠坊（の）むつきほしたり蓮（の）花（七番日記）

#### 3) 棒突（村を警護する役人）

- ・ 棒突や石垣たゝく寒の入（八番日記）
- ・ 棒突があごでをしゆる桜哉（七番日記）

#### 4) 団左衛門（浅草に居を置いた基締め）

- ・ 近よれば団左衛門が桜哉（文政句帖）

#### 5) 山守

- ・ 山守の箒の先を行春ぞ（七番日記）
- ・ 山守よ是でいく度の初時雨（文化句帖）

#### 6) 野守

- ・ 鶏頭に向ひあふたる野守哉（西紀書込）
- ・ 木がらしに野守が軒盛り哉（文政句帖）

#### 7) わらじ売

- ・ 売わらじぶらり（と）下る桜哉（七番日記）
- ・ 売わらじ松につるして苔清水（七番日記）

- 8) 茶せん売  
・売ぶりの色に寂しき茶せん哉 (文化句帖)

- 9) 竹売  
・竹売の竹にもしばし雀哉 (文化句帖)

### 3. 大道芸人 (被差別部落の人々が主に就いた)

- 1) 節季候 (歳末に、セキゾロと叫ぶ門付け)  
・節季候のむなしく見るや角田川 (文化句帖)  
・せき候や小銭に羽根が生えて舞ふ (梅塵八番)  
・せき候やさゝらでなでる梅の花 (八番日記)

- 2) 獅子  
・かま獅子があごではらひぬ門の松 (文政版)  
・門獅子やしゝが口から梅の花 (希杖本)  
・とちゝと角兵衛獅子もぼたん哉 (八番日記)

- 3) 春駒 (馬の首の形を持ち、歌い踊る芸人)  
・乞食の春駒などもかすみ哉 (七番日記)  
・春駒の歌でとかすや門の雪 (七番日記)  
・春駒や人が真似てもいさましき (文政句帖)

- 4) 辻謡 (小謡を詠う芸人)  
・辻謡風も上 (つ) ていたりけり (七番日記)  
・木がらしや地びたに暮るゝ辻謡ひ (文化句帖)

- 5) 豆蔵 (手品や曲芸師)  
・豆蔵が口まねもするつばめ哉 (文政句帖)

- 6) 舞々 (幸若舞等を舞う芸人)  
・舞ゝや翌なき春を顔を染て (文化句帖)  
・舞ゝや翌なき春をむり笑 (発句題叢)

- 7) 猿廻  
・矢の先や子を (背) 負ひつゝ猿廻 (一茶園)  
・狙引は猿に持せて風 (文化句帖)

- 8) 鉢たたき (お経を唱える門付け)  
・しばしまて白髪くらべん鉢敲 (文化句帖)  
・細長い雲のはづれや鉢たゝき (七番日記)  
・鶯に目を覚ますな鉢たゝき (七番日記)

- 9) 福俵 (小さな米俵を扱う芸人)  
・待てゝも来るや福豆福俵 (文政句帖)

- 10) 放下師 (鞠や刀を投げるなどを主とした芸人)  
・放下師が鼓打込清水哉 (七番日記)

- ・放下師が小楯にとりしわか葉哉 (七番日記)

- 11) 千秋万歳法師  
・万歳よも一ツはやせ春の雪 (享和句帖)  
・万歳や馬の尻へも一祝 (七番日記)  
・万歳や面もかぶらずほゝやれと (文政句帖)

- 12) 絵解 (仏教の地獄絵などの解説)  
・藤棚に翌巡る江戸の画解哉 (七番日記)

### 4. 生活困窮の人々

- 1) 乞食  
・美しき風上がりけり乞食小屋 (七番日記)  
・乞食子や貰ひながらの風 (浅黄空他)  
・乞食子がおろゝ拝む雛哉 (七番日記)  
・乞食子や膝の上迄けさの霜 (八番日記)

- 2) 遊女  
・夜に入れば遊女袖引く柳哉 (文政句帖)  
・夕顔にはのゝゝ見ゆる夜たか哉 (文政句帖)  
・菜の花や袖 (を) 苦にする小傾城 (七番日記)

- 3) 順礼  
・小順礼もらひながらや風 (八番日記)  
・ふだらくや赤い袷の小順礼 (八番日記)

- 4) 貧乏  
・我庵や貧乏がくしの雪とける (七番日記)  
・祖先代々と貧乏はだか哉 (文政九十句写)  
・秋風やつれても行かぬ貧 (乏) 神 (七番日記)

- 5) 行商の女性  
・麦秋や子を負ながらいはし売 (おらが春)  
・鯛めせめせとて泣子負ながら (発句鈔追加)

## Ⅵ. 「差別解消」に向けて

### 1. 共有したい精神

一茶は、虐げられた人々を暖かい「心の目」で「目には映っても、見えない人々」を見つめた。そこには差別に抗し、偏見を捨て、共に共感をもって歩もうとする、現代の我々に訴えかけてくる「共生社会」の原点がある。一茶は同じ目線や立場で、共感の句を残している。

我々は誰でも「差別する側」になり得る存在であることを、ユダヤ人で収容所に収監されその後アメリカ亡命し、ナチス・ドイツと闘った政治哲学者ハンナ・アーレ

ントは、「全体主義の起原」などの著作で主張している。アーレントの根本命題はなぜホロコーストに至ったのかを分析し、その深淵に全体主義があったことを述べ、それに抗するためには絶えず思考することの大切さを訴えている。

併せてドイツの元大統領・ヴァイツゼッカー<sup>20)</sup>も「いやしくもあの過去に対して眼を閉ざすものは、結局は現在に対しても盲目となります。非人間的な出来事を想起しようとしないうちは、新たな感染の危機に対して再び抵抗力が弱くなります。」と述べている。

人間の歴史には差別の記録が数多く残されており、それらに深い反省と改善の思考を積み重ねることが大切である。それによって『合理的配慮』とは、暖かい配慮にのあり方について思考し、配慮を積み重ねることが大切であることを学ぶのである。

## 2. 本学の「合理的配慮」への提言

「差別」と「障がい者」の視点で「障害者差別解消法」について考察してきた。この法律は「合理的配慮」に該当する事項を積み重ねることを主眼としており、そのために差別を解消の反面教師として「不当な差別的取扱いを」を概観した。

「差別」は「障がい者」、人種、民族、宗教、経済力、歴史的偏見等によるなど起因は様々であるが、「障がい者」はその中でも、絶えずピラミッドで言えば、底辺に位置づけられ、その中核に位置していたことを忘れてはならない。

現在においても津波や原発事故からの避難では、車椅子の利用者は特に苦勞したことや、避難所暮らしの中で自閉症の子ども達やその家族が苦勞したことが報道されている。老人も同じ状況である。弱者に優しい世界は、本来は全ての人に優しい世界であることを確認したい。

この法令は決して遠い世界の話でなくごく身近な話であり、本学で考えなければならない、「障がい」のある学生のための適用が緊要な課題である。以下にその指針を列挙して本考察を終わる。

- ①「差別解消に関する委員会の設置」
- ②「委員会への、障がいのある学生当事者の参加」
- ③「本学の差別解消宣言」の作成
- ④「合理的配慮の事例検討」
  - \*ハード面（建物構造、バリアフリーの視点）
  - \*ソフト面（障がい者向けの ICT の活用）
- ⑤「相談室の設置」
- ⑥「理解啓発のための講演会」の開催
- ⑦「将来の就職に向けての支援」

いずれにしても民間の『努力義務』ではなく国と同じレベルの「義務」として取り組む必要があるだろう。

## 文献

- <sup>1)</sup> 渋谷敬三（1985）：日本常民生活絵引（第二巻）一遍聖絵，平凡社，p173，p201.
- <sup>2)</sup> 舟橋 治（2005）：近現代日本ハンセン病問題資料集成（補巻），不二出版，p78.
- <sup>3)</sup> 神谷 美恵子（1990）：人間をみつめて，みすず書房，p140.
- <sup>4)</sup> 北海道会議事速記録（1924）：（大正13年：19回～24回），北海道庁.
- <sup>5)</sup> 本間一夫（1996）：指と耳で読む，岩波書店，p26.
- <sup>6)</sup> 伊藤 嘉代子（2007）：養護児童施設におけるレジデンシャルワーク，明石書店，p95.
- <sup>7)</sup> ヘス（2004）：アウシュビッツ収容所，講談社，p382.
- <sup>8)</sup> フランツ・ルツィウス（1991）：灰色のバスがやってきた，草思社，pp190-191
- <sup>9)</sup> 中西喜久司（2002）：ナチスドイツと聴覚障害者，文理閣，pp22-23，pp64-66.
- <sup>10)</sup> 仁木悦子（1091）：もうひとつの太平洋戦争，立風書房，p216.
- <sup>11)</sup> 岩崎佳枝（1987）：職人歌合，平凡社.
- <sup>12)</sup> 渋谷敬三（1985）：日本常民生活絵引（第五巻）融通念仏縁起，平凡社，p195.
- <sup>13)</sup> 野中広務・辛 淑玉（2009）：差別と日本人，角川書店，p74.
- <sup>14)</sup> ジョン・W・ダワー（1987）：人種偏見，TBSブリタニカ.
- <sup>15)</sup> 金子マーティン（1998）：「ジプシー収容所」の記憶，岩波書店，p55.
- <sup>16)</sup> 津田左右吉（1966）：文学に現われたる我が国民思想の研究，岩波書店，p279.
- <sup>17)</sup> 小澤弘・小林忠（2013）：『熙代勝覧』の日本橋，小学館，p7.
- <sup>18)</sup> 菅江真澄（1965）：菅江真澄遊覧記（1），平凡社，pp78-79
- <sup>19)</sup> 東京の被差別部落：弾左衛門由緒書，部落解放同盟東京都連合会（ホームページ）.
- <sup>20)</sup> ヴァイツゼッカー（1994）：過去の克服・二つの戦後日本放送出版協会，p27.

（平成27年5月31日・記）